

リボンの金魚

伊藤久昭

二週間ほど眠っていたらしい。そして、現状と、これまでの経過を、ある程度理解出来るまでに、二日は掛かっている。もちろん、今でも正確に理解できているとは断言できないが。

記憶を手繰り寄せ、新しく入ってくる、順不同で断片的な情報を、つなぎ合わせ積み上げるとは、ジグソーパズルや、発掘した土器の破片を組み合わせる作業に似て、完成品に仕上げる張り合いはあるが、その過程は不安定で、絶えず、一瞬にして瓦解してしまふ不安が付きまとい続けている。

今日も、部下の桑田が見舞いに来た。意識を取り戻してからでも、四度目であるが、その馴れた様子からすると、その前にも、何回か来てくれていたのであろう。

妻の清子は先程帰宅したようで、付き添いはない。こんな時の桑田は遠慮がなくなるのか、誰かがいる時よりも積極

的に、私に働きかけてくる。桑田は独り言を言いながら、私の目を覗き込むように顔を近づけ、私の名前を呼ぶ。肩を揺さぶる。顔の上で掌を左右に動かし、私の眼球の動きを探る。耳元で大きな声を上げる。頬をペタペタとはたき、さらに腕を抓っているようだ。幸か不幸か私には皮膚感覚が全くないので、痛くも痒くもないが、とにかく、私の意識の有無を確認するために、思い付く限りの、ありとあらゆる手段を尽くす。

ほとんど動けない患者が、自分の意思を、僅かに動くまばたきで伝達するようすを、テレビで見たことがある。桑田もそれを私に要求しているようだ。看護士が啖の吸引に來たのをきっかけに、桑田は帰っていった。

私が、自分の現状や経緯を把握するための情報は、清子の話掛けや、見舞客への清子の説明から得られることが多い

が、桑田の独り言から得られることもある。そう言う意味でも、私は桑田に感謝すべきなのだ。

私は中堅と言われる、金属加工会社に勤めている。桑田は私より五歳下で、十数人いる部下の内の一人である。普段特に目を掛けていた訳ではないが、大学が同窓ということ、それなりに親近感を持ち、私の自宅にも何度か来ていた。見舞いの回数も、他の部下より余程多いようだ。桑田は、細かい事にはあまり気が付かず、どちらかと言えば、他人のことを気にしない、大ざっぱな人間と想っていたが、これほど人情深く、義理堅く濃やかな一面もあつたのだ。私はできることなら桑田の手を取って、感謝の気持ちを、思い切り表したいと思った。

私の発作は、確か七月七日だったと思う。今の私には、事の発端からその後の経過の情報を、自分が納得出来るように、積極的に取り寄せる術がない。唐突で断片的に入ってくる情報は、決して意のままにはならない。全てにおいて受動的なのだ。それをつなぎ合わせて、出来上がった

た認識には、現在の意識が正常であるとも言ひ切れない事もあり、絶えず「ようだ」とか「らしい」という、推定とか伝聞の、語尾を付けなければならぬ。

あの日、帰宅途中の車で、笹を担いだ自転車の老人を、追い越した事を記憶している。ああ七夕なんだ、孫が笹飾りをするのだろう、と思ったものだ。割合大きな笹を担いで、余り広くもない農道の左側を、少しふらつきながら乗っているので、気をつけなければと思った事も、はつきり記憶している。

私が記憶を辿りながら、気付いた事は、内容の重要度には関係なく、非常に鮮明に記憶している部分と、何としてもはつきりしない、不鮮明か、明らかに記憶の欠落と思われる、空白の時間帯がある事だ。自転車の老人のシャツの色まで覚えているのに、帰宅した時の家の様子や、清子の様子は全く思い出せない。

あの日の帰宅後、どんな会話をしてどのような食事であったかは記憶にないが、とにかく、その日の夕食後であったと思う。突然、激しい頭痛に襲われた。後頭部が震源地のような気がしたが、頭

全体が、音を立ててひび割れるのではと、思うほどの激しさであった。これまでに全く経験のない異常な痛さで、とても大きく大変な事態に直面しているらしいという、不安が一気に襲ってきた。

しかし、頭痛や精神的な不安はごく短時間であったと思う。すぐに意識は切れている。それでも意識が切れる直前の、激痛が急速に薄れていく時の快感は、不思議なくらいにはつきりと記憶している。

意識が回復して最初に見えた場面は、白い天井と蛍光灯、カーテンの一部とカーテンレールの細い金属に吊された、リボンで編まれた金魚であった。ケーキの箱を飾る時に使うような、透き通った薄いピンクの布のリボンで編まれた金魚は、長い尾を垂らして、微かに揺れていた。

暫くすると、椅子をがたつかせる音がして、清子の顔が思わぬくらい近い近さで、私の真上に現れた。私の変化に気付いたのだ。清子は驚きと喜びが、入り交じった顔をさらに近づけ、私の名前を立て続けに何度も呼んだ。そして、医者と呼びに行ったのであろう、走るようなスリッパの音が、割合長く聞こえた。

もちろん、後から知ったことであるが、二週間近く、大いびきで眠り続けていた私が、この時初めて目を開けたのだ。

私はまず、今の自分の状態を、把握したいと思った。入ってくる情報は、視野も狭く、話し声や足音や、何かの装置の、規則的な音だけであったが、自分が病院のベッドにいることだけは、すぐに理解できた。

「もう大丈夫でしょうね」

医者は清子の問いには答えず、私を覗き込み、名前を呼び、腕をたたいて、しきりに私の反応を探った。

「意識は回復したんですね」

清子が性急に尋ねた。

「目は開きましたが、意識が戻ったかどうかは、もう少し様子を見ないと」

医者は手に持っている、カルテと私を交互に見ながら、少し間をおいてから無表情のまま言った。

この医者の言葉を、私はすぐには理解できなかった。私の現状が、医者に伝わっていないとは思えなかった。もちろん、最初は私の意思表示の仕方がまずいのだろうと、軽く考えていたが、時間が

経過しても、医者と清子の様子は変わらなかつた。

私はすでに意識を回復している。現に病院にいる事や、妻の清子であることが分かり、しかも二人の会話はもちろん、物音さえも正確に聞こえているのだから、意識が回復しているとは自信を持って言える。しかし、二人の様子からすると、私の実態が、二人には伝わっていないようなのだ。一体、どうした事なのだろう。私は急に不安になつた。

清子是不審な顔つきで私を覗き込み、名前を呼び、何度も同じ言葉で話掛けをしてきた。それは赤子をあやす時のように、馬鹿にされているようで、少し腹立たしくさえ思われた。

私の兄と清子の兄が、連れ立ってやつてきた。偶然、病院の玄関で一緒になつたと、二人が同時に喋つた。三人の会話の内容からすると、入院した当初に、見舞いに来て、今回、私の変化の連絡を受け、再度来たようだ。清子から一通りの説明を聞いた後、二人は交互に私に顔を近付け、執拗に呼び掛けてきた。生臭い

息が、顔に掛かっているようで、少し不快に思つた。

「何か仕事の関係で、重大なことでもあつたんだろうか」

私の兄が独り言のように言つた。発作には、引き金となる何か突発的なことがあつたと考えるのが、自然だと思つているのだ。

「働き盛りで、責任のある立場ですから、いろいろなストレスもあるのでしょうか」

暫くして清子の兄が言つた。

「入院が長いから清子さんも大変だけれど、よろしく頼みます。頑張つて下さいね」

暫くすると、手持ちぶさたになつたような雰囲気で、また私の顔を覗き込み、名前を二・三度呼ぶと、私の兄は帰つた。「回復の兆しが見えてよかつたけれど、まだまだ先は長いかも知れない。お前も大変だね。体には気をつけるんだよ」

残つた清子の兄が労つた。

「今考えてみると、あの日はね、帰宅した時、何だか様子が変わつたの。病気とか言うんじゃないくて、会社で何かあつたのか、そわそわしているかと思うと、じつと考え込んでいたようだったの。夕食の

時に話しかけても、心ここにあらずつて言う感じだったの」

私の兄という気安さで、この時ふと漏らした清子の言葉は、私の記憶にない、新しい情報だつた。あの日の私に、一体何があつたのだろう。

私の新たな容体を聞き付けて、親類や友人たちが三三五五やつてきた。清子はその度に、ある時は涙を流しある時は笑顔で、事のいきさつと私の現状を丁寧に話した。それは私にとっては都合良い情報源となり、暫くすると、私の置かれていた立場を、完全に認識できたような氣になつた。

しかし、私と彼や彼女らとの間には、基本的に絶対的な、理解の違いがある事も、はっきりした。そして、それを知っているのが私だけであることも、確信させられた。

「目を開けているので、見えているように、聞かせてもいるようにも思えますが、実際には、眠っている時と同じで、意識は戻っていないそうです」

清子がやつてきたすべての人に、残念さを語調に表し、必ず付け加えた言葉で

ある。

「検査の数値を基に、これまでの症例も参考にして、多方面から検討しましたが、残念ながら、脳幹が侵されているので、まだ意識は回復していないと判断しています。俗に脳幹は神の領域と言われています」

医者の診断を、半信半疑ながらも、清子は受け入れざるを得なかったのである。私は、視覚も聴覚も正常で、それなりに思考力もあり、記憶力も斑ではあるが、ほとんど戻っていると思っている。だから間違いない意識は回復している。ところが、肉体は全く動かないようだ。手足が動かないのももちろん、声も出なければまばたきも自分の意思ではできず、眼球すら自分では動かさせないらしい。外部からの刺激に対して、意識的には全く反応ができないのだから、意識が無いと診断されても、仕方がないのである。私は考えた。何とか意識の回復を伝えたい。視覚も聴覚も完全に復活している事を、伝える方法はないだろうか。もし、微かにでもそれができれば、状況は大きく変わるはずだ。

私には、十分な時間がある。何かを考えていなければ、一日が長かった。

自分の意思を伝えられない、悔しさと歯がゆさは、日に日に強くなっていった。そして、この状態が何時まで続くのだろうという不安が、大きくなっていった。ただ、この時、私はある種の楽しみを見出だした。それは少々陰険で卑屈なものではあるが、この状態の私には許されることであると思われた。

私が意識を回復している事を知っているのは私だけである。周囲の人達は、私には意識がないと思っているのだから、私の側で私に遠慮のない言動をするであろう。私の知らなかった、私には隠していた一面を見せるに違いない。今の私は、映画にあった透明人間のような立場なのだ。どうせ近い将来、意思の疎通が出来るようになれば、私の陰謀はばれるであろうが、それまではこっそり観察するのにも面白いかもしれない。今の私に与えられた、唯一の楽しみなのだ。

それでも、早く伝えられるようになるに越したことはない。私は体のあらゆる部分の筋肉を、動かそうと試みた。手や

脚の指先はもちろん、目や口や鼻や耳まで、思い切り力を込めてみた。自分では動いた事が分からなくても、他から見れば、少しは動いているかもしれない。いつも側にいる清子なら、ほんの少しの動きでも、気が付くだろうと思い、清子や医者が覗き込んでいる時には、特に力を込めてやってみた。しかし、清子や医者の表情には、全く変化はなかった。

ここまで回復できた事実があるのだから、そのうちに筋肉は動くようになり、仮に十分な会話は出来なくても、何らかの形で応答が出来るぐらいの可能性を、この時点ではまだ疑っていないかった。

時々寝具の交換や着替えのため、看護士が私の体を動かした。その時は嬉しかった。ごく短時間ではあるが、白い天井と壁とカーテンとリボンの金魚だけではない、これまで見たことのない新鮮な景色が見えた。窓ガラスを通して、外の景色が見えることもあった。樹木の濃い緑が、青い空を背景にくっきりと見えた。窓外は、ベッドで悶々としている自分とは全く関係なく、いつもと変わらない、穏やかで平和な世界なのだ。NHKラジオの、

昼の憩いのテーマ曲が聞こえてきた。

上司の宮城がやってきた。仕事が忙しくて見舞いの遅れた事を、しきりに謝した。「やっと目を開けるようにはなりませんが、意識は回復していません」

清子は会社に迷惑を掛けている事を詫言した後、これまでの経過を詳しく説明した。

「何だか、十分見えているし、聞こえているようにも思えますがね。何かのきっかけがあれば、急速に回復しますよ」

本当にそう思っているのかは疑わしいが、宮城は見舞客の誰もが言う言葉を繰り返して慰めた。私には、側で何が話されようと、ただ天井を見ているしか仕様がなかった。もしかしたら、ゆがんだ口をだらしなく開けているのかもしれないとも思った。

「あの日には、会社で何かあったのですうか。帰宅した時、いつもと様子が違ったのですが」

清子もやはり気になっていたのだ。先日、兄に言っていた事で、私の記憶が全く消えている部分である。記憶に空白の時間帯がある事は、気持ちの悪いもので、

もしかしたら、会社での出来事が発作の引き金になったのかもしれないと思うと、私は緊張して宮城の返答を待った。「いや、私の知っている限りでは、特に何もなかったと思いますよ。念のため同室の者に聞いてみます」

暫く考えた後で、宮城が言った。宮城が本当に知らないのかどうかは、私には判断出来なかった。帰宅後まで興奮していた原因が、会社での事であれば、直属の上司の宮城が、知らない筈はない。それでは社外で何かあったのだろうか。この時の宮城は私の視野の外にあって、表情の見えないのが残念であった。

眠っているのか目覚めているのか、夢なのか現実なのか、分からない。何も見えないから、目は瞑っているのだろう。医者の方が聞こえた。同様の会話は、これまでにもあったかも知れないが、私が聞いたのは、この時が初めてであった。医者は宣告するような言い方をしている。

「私たちはいろいろな検査数値の変動や、症状の経過を検討しました。その結論ですが、残念ながら、意識が回復する可能

性は、非常に小さいと思われる。時々手足の先が少し動いたり、表情が変化したように見えることもありませんが、それは筋肉の生理的な緊張と弛緩からくるもので、患者さんが意識的に行っているとは、到底考えられません。本当に残念ですが」

これを聞いている時の清子の表情は、私には見えていなかった。しばらく沈黙があった。

「それで、命はどうなのでしょう。この様な状態でも、生きられるのでしょうか」
触れたくない恐ろしいポイントに触れなければならぬ、清子の複雑な気持ち、小さく震える声に表れていた。医者の返答までの静寂の数秒を、清子は最高の緊張で、必死に耐えているのであろう。私は、苦しむ清子の表情が見えないことを、幸運に思った。

「そのことです。現在、点滴と酸素の補助で、生命を維持しています。辛い患者さんは心臓が強いので、今のところ維持できています。しかし、体力は徐々にですが確実に減退していきます。体が衰弱していくと、他の病気を併発したり、

細菌に感染する危険性は、だんだん大きくなっていきます。私たちは、感染症を心配しています」

目を開けたようだ。白い天井に二本の蛍光灯が点いている。ほとんど真上を向いて、寝ているのである。聞き慣れた機械的で規則的な音が、耳鳴りのように聞こえる。

目を開けたことに気付いた清子が覗き込んで、声を掛けてきた。この時、清子の雰囲気がいともとは少し違っていた。どこかへ出かけた後なのか、それともこれから出かけるのか、キチツとした服装で薄化粧をしている。平生からそれなりに、身綺麗にしていたが、病院で見ると清子は、身なりを構わなくなり、十歳ほども老けたように見え、私の看病が心身共に負担になっている事が、はっきり現れていた。ところが今日は違っている。

この時の医者と清子の会話から、私は、また、二日間近く眠っていたことが分かった。治癒の可能性が無いと言った医者の言葉は、夢では無く現実だったのだ。清子もそうであろうが、私も治癒の可能性を信じて疑わなかった。もちろん、完

全な状態に戻れるとは思えなかったが、この状態のまま自分の命が無くなる場面は、全く想像したことがない。それは根拠の無いことではあるが、日本の医学をもつてすれば、治癒する事は、百パーセント間違いないと思っていた。

私は必死に筋肉を動かす試みをした。そのうちに何とかなると思っていたのは、楽観的で甘かったのだ。もし意識のないまま絶命したのであれば、それはそれで仕方がないとしても、意識がありながら、それを誰にも知ってもらえない今の状態で、命がなくなる何て、生き埋めにされるようなもので、堪ったものではない。とにかく、早急に、意識が回復している事実を伝えたい。微かにでもそれができれば、事態は大きく展開する筈だ。医者が言った今後の見通しも変わり、当然取るべき処置も変わるに違いない。

おそらく翌日と思われるが、桑田がやってきた。今日は目を開けているんだねと言いながら、清子に缶コーヒーと小さなケーキの箱を渡した。清子は黙って受け取った。ラフな服装の桑田は、私の

意識を確かめようと、いつものようにひとしきり私を刺激した。

「やっぱり意識は戻ってないんだ」

桑田は馴れたしぐさで、側のパイプ椅子を引き寄せ腰を下ろした。

「この前君が言っていた、発作を起こした日の社内での出来事を、上層部の人に、それとなく聞いたんだけど、それがどうも、沖繩支社への転勤を、打診されたようなんだ。もちろん突然の転勤打診なんて、そうあるものじゃ無いし、普通で考えれば左遷なんだけど」

清子は目を見開き、すぐには言葉が出なかった。

「そんなことがあったの。そんな大事なことを、どうして言ってくれなかったのかしら」

「生活が大きく変わる大変な事なので、言い出し難かったんじゃないだろうか」

「でも、なぜ、そんな遠いところまで飛ばされるの。もしかして、何か大きな失敗をしたのかしら」

「その理由が、どうもはつきりしないんだけど、情報漏洩の疑いが掛かった、噂があるんだ。最近、一部の役員の間で、

うちの情報が漏れているかもしれないという事が、問題になっていたらしいんだ。役員会で本人に確認すると、一応は否定したが、否定の仕方が弱かったのと、その時の様子を見て、役員はますます疑いを強めたいらしい。ただしこの件は、会社にとつても信用に関わる重大事なので、上層部の、ごく少数で対処するつもりらしい。とにかく、自分達には、はっきりしたことが分からず、全て噂の域を出ていない」

清子は暫く言葉も出ない様子であった。この時の私の驚きは大きかった。全く記憶に無い思いも寄らない言葉が、次々と飛び出してきたのだ。桑田の口がマジシャンの帽子のようで、次に何が出てくるのか予想出来ない。いくら反応出来ない私でも、この時の桑田の言葉を聞いて、驚愕と憤りが、表情に現れたであろうと思われた。しかし、側にいる二人に、全く変化はなかった。

私の頭は目まぐるしく回転し、斑に残っている記憶を、必死に掻き集めた。自分が会社の情報を漏洩するなど、そんな事は考えた事がなく、その誘惑すら

感じた事がない。

あの日の、出勤する時の場面から、会社に着くと、早速あった臨時の会議の様子も思い出せた。議題も箇条書きふうにはほとんど記憶していたが、情報漏洩に関する事でも、もちろん私個人に関する議題でも決してなかった。課に戻って平常の仕事をし、昼食はいつもの定食屋へ行った。午後は課内での会議があったが、その内容もほぼ記憶しているつもりである。

あの日のスケジュールの中に、上司に呼び出されて、詰問されたとか打診されるといふ、そんな時間的な余裕もない筈である。しかし、悲しいかな私の記憶が、あくまでも斑である事は、認めなければならぬ。空白の時間帯があるという負い目が、今の私に思い出せる事実が、ただそれだけだという断言を出来なくさせている。

私は必死になった。目覚めている時間の全てを使い、記憶のわずかな断片でも拾い集めたいと思つた。しかし、それに関する記憶は、小片すら出てこなかった。桑田は噂の域だとは言っているが、噂がある以上、内容が少々違っているも、私の身に何かの事態が生じた事は、十分考

えられる。

情報の漏洩と転勤の打診という、二つのキーワードがある。前者が原因で後者が結果である。あの日、その両方が同時に私に投げ掛けられたのであろうか。それとも、どちらか片方だけが事実なのだろうか。

誠実に働く主人公が、秘密漏洩の疑いを掛けられるという、テレビドラマはよくある。主人公は非常に窮地に陥るが、名探偵が現れ、放映時間の終わりが近付くと、急激に謎が解けて、めでたしめでたしで終わる。そんなドラマのような事が、実際にあるのだろうか。

情報の漏洩という事は、自社の情報を他社へ売ったという事だ。同業者の連絡会議に、部長の伴をして出席しているの、他社に知人はいるが、そんなものを売買するような、そんな関係になっている人物は一人もいない。それとも私の言動に、何か誤解されるようなところが、あったのだろうか。不安はあるものの、私には到底納得出来なかった。

情報漏洩の部分とはもかくとして、あの日、転勤打診を受けた事は、事実なの

だろうか。帰宅後の様子が、普段とは違っていたという、清子の言葉は信用出来るから、私を動揺させる何かが、あった事は事実なのかも知れない。

詰問や打診をされたのは、何日か前の事で、私に与えられた、返答の期限がある日だったのだろうか。返答に窮した私は、清子に話していなかった事もあり、非常に大きなプレッシャーを感じたのであろうか。そうであれば、時間的な面で、一応は話の筋が通ると言える。

もし、桑田のいう事が事実なら、上司の宮城が知らない筈はない。先日、宮城が清子に、何もなかったと言ったのはどうしてだろう。清子の現在置かれている立場や心境を慮つての、配慮なのだろうか。私の本心は、それは否定していた。

私はどちらかといえば、社内での反宮城派であった。独善的で余りにも上昇志向の強い宮城が、好きにはなれなかった。組織の一員なので、あからさまに反目していた訳ではないが、宮城自身はそれなりに、私の気持ちを感じていたとは思ふ。宮城が私の妻に、心配りをするなどとは思えない。宮城は、私の復帰が不可能だ

と判断し、清子に今更知らせるまでもあるまいと考え、適当に言葉を濁したとするほうが、当たっていると思う。

私は同僚か部下の誰かが見舞いに来てくれて、私に聞こえるところで、清子が質問する場面を待ち望んだ。積極的に、自分で究明する手段の無い事が、この時ほど、もどかしく悔しく思ったことほなかった。

また眠っていたらしい。姿は見えないが、明らかに、部下の吉井と、山角の特徴ある甲高い声が聞こえた。久し振りに聞く彼等の声が懐かしく、涙ぐんでいるのではないかと思われた。

私は情報漏洩と転勤の噂の件を、聞き出さねばならないと思った。この機会を逃せば、もう、真実を知るチャンスはないかもしれない。より正確な情報が欲しい。私は祈るような気持ちで、神経を集めた。桑田とは違った角度からの、情報がもたらされることは、十分あり得ると思っていた。

私の期待は外れた。私が眠っている間に話題になったのかもしれないが、目覚

めてからは、期待していた話題は出なかった。私は、吉井や山角に問い質さない清子を、心の中で責めた。桑田のあやふやな情報を、全て事実と思っているかと、清子に詰問したかった。

二人は帰っていた。帰りがけに思い出したように、吉井が言った。

「大谷課長が八戸支社へ転勤されました。親しくされていたので、意識が戻られませんでしたらお伝え下さい」

課は違うが、大谷とは同期入社で、社内が一番親しい仲だった。割合せつかな私を、穏やかな大谷がいつも抑えてくれていた。時期外れの今、大谷が転勤したらしい。これも不可解である。社内が何かの突発的な事象で、大きく動揺しているのだろうか。

目が開いたようだ。この時の私は、床ずれを防ぐために、左半身の下にクッションが差し込まれているらしく、ベッドの側のパイプ椅子に腰掛けている清子が、真正面に見えた。すると驚いた事に、桑田が清子の後ろにびったり寄り添い、両肩に手を掛けている。清子は清子で、背後に桑田に、甘えるように品を作って

いる。私は一瞬目を疑った。カーテンは少しは開いているが、ベッドの回りはほとんど囲まれているようだ。私は見てはいけないものを見てるように思った。目を反らせたかった。しかし、自由の利かない私は、その場面を見ている以外に何もできなかった。悲しいことに私は、見たいものを選べないだけでなく、見たくないものでも避けられず、見続けなければならぬのだ。

この時以後、私の頭は逆に回転を始めたように思う。清子と桑田との関係は、上司の妻と部下の関係でないばかりか、一般的な友人関係も越えている。しかも、二人の様子は、自然で日常的であり、平然としているようすから、最近ではなく相当以前からそのような関係になっていたようだ。

病院での清子と桑田の会話が、私の発作前と比べて、非常に馴々しいことに、違和感を感じたことはあった。それは、桑田が親切に、度々見舞いに来てくれて、親身になっていろいろ相談に乗ってくれているから、親しくなったのであろうと思っていた。また、そうした人間が側に

いることは、こんな時の清子には、必要なことだとも思っていた。私は桑田に感謝こそせよ、疑ったことはなかった。しかし、目の前の光景は、私に対する、明らかな背信行為を物語っている。

もし、今私の考えている事が真実だとすれば、これまでの清子や桑田の言動の多くが、私の思っていたのとは、違った意味を持つていたのではないだろうか。二人の私への呼び掛けや、私に与えた刺激の意味は、私の意識を喚起しようとしたのではなく、単に、私の意識の無い事を確認してただけではないのだろうか。清子が私の命を、心配そうに医者に尋ねていたのはどういう意味か。思いたくはないが、これも、私が素直に思っていたのとは、違っていたのかも知れない。私の最期が何時になるかは、医者でも分からないのだから、私にも分かりようがない。生きている限り私の一日は長い。考える時間は十分ある。また、そうしているだけが、私の生の全てなのだ。

「血液中の酸素の数値が、少々の変動はありますが、どうしても上がってきませ

ん。現在の数値は、率直に言って、何時呼吸が止まっても、不思議ではありません。そこで端的に申し上げますが、いざと言う時に、延命装置を付けるかどうか、ご家族で相談して下さい。ご存じだと思いますが、延命装置を付けても、症状が良くなる訳ではありませんが、生命のある状態は幾らか長く続けられます。しかし、症状の良くなる見込みのない患者さんが、装置によって生かされている状態を、ご家族の方がどこまで我慢出来るかという問題は、度々起こっていることです。自分で呼吸が出来ず、装置をつけてやっと生命が維持できている患者さんから、装置を外す時は、故意に死亡させる事になりますので、その外す瞬間の決定は、医者にとってもご家族にとっても、大きな苦しみになります」

医者の声が夢の中のように聞こえた。また眠っていたようだ。目が開いた。医者とはベッドの反対側に立って、清子がうなだれて聞いているのが、視界の隅に見える。

「少し考えさせて下さい」
清子も即答できなかつたようだ。暫く

して、小さな声で言った。

医者と入れ替わりに、桑田が入ってきた。桑田は私をちよっと覗き込んでから、持つてきたものを、黙ってベッド越しに清子に渡した。缶コーヒーと葡萄のパックが、私の顔の上を右から左へ通過した。「廊下が少し騒がしいようだね」

「昨日亡くなられた方の後へ、新しい患者さんが入られるようよ」

「死亡した患者のベッドを一度運び出し、綺麗にして次の患者のためにまた運び込む。この作業は、病院では日常的なんだね」

「さっき、いざと言う時に延命装置を付けるかどうか聞かれたの。でも、もうそこまではしないつもりなの」

清子が迷っていると思ったのは、私の希望的な推測だったようだ。清子の気持ちは決まっていたのだ。わざと即答しなかったただけだったのだ。

「かわいそうなようだけど仕方がないだろう。延命装置は、外す時が難しいそうだから」

清子の馴々しさと、桑田のぞんざいな喋り方がいつもより気になった。しかし、

考えてみれば、自分で何も出来ない今の私にとつて、こんなことはごく些細な事なのかも知れない。また、そう思わなければならぬのだろう。

明るい太陽の下、弧を描くコバルトブルーの海原。崖下の突き出た岩岩に砕ける白波。どこからかエイサーの躍動的なリズムが聞こえてくる。沖繩の残波岬に違いない。エイサーの掛け声の中に、清子と桑田の話し声が聞こえる。内容はつきりしない。夢なのか現実なのか分からない。沖繩への転勤、望むところだと、大きな声で言い切ったように思った。

パイプ椅子を、開いて置く音が大きく聞こえた。私は眠っていたのだ。最近、いつの間にか眠ってしまうことが多く、また、意識はありながら目を瞑っている時間が、増えてきているようだ。こんな過程を経て、その時間帯がどんどん増えて行き、全部眠った状態になった時が私の最期なのかもしれない。これまでで逝った人達は、こういう経過で最期を迎えたのだろうか。

四年ほど前、出張で沖繩支社へ行った。

規模は小さく出張所のようなものである。最後の一日は、私が沖繩は初めてだと知って、確か金城という社員が、めばしい観光地の案内をしてくれた。空も海も緑も美しく、南国の花々も鮮やかだった。太平洋戦争の末期、何万人もの死者をだした島と、今、時間がゆったり流れているこの島が、同じには思えなかった。私が南国の雰囲気に浸っている様子を、運転している金城が見て言った。

「車では余り分かりませんが、発着する戦闘機やヘリの轟音はひどいものです。それと、島民と米兵や基地住民とのトラブルはよくあるですよ。内地には余り伝わらないようですが。基地のあるところは、島内でも特に景観のよいところなのです」

ひめゆり平和資料館では、若い女性たちの悲劇が、体の神髄まで突き刺さってきた。

「島の人達は、戦争の悲惨さを、内地の人に余り語りたがらないんです。どうせ、本当のところは分かかって貰えないという、諦めなんですよね」

夜の居酒屋での、郷土料理で飲んだ泡

盛は美味しかった。こんなところでんびりと生活するのも良いだろうなど、少し酔っている金城に言った。金城は少し笑っただけで、何も言わなかった。

聞き覚えのない男性の声で目覚めた。「興奮している様子だったことは、間違いないですね。普段とは明らかに違う様子なのに、どうして理由を聞かなかったのですか」

「あの時は、会社で何かあったのだろくらいに軽く思っていました。後から聞いたんですが、突然の転勤打診があったようなんです」

清子は必死に弁解するように言った。「ええそのことは、会社に確かめたんですが、当日は、特別なことは何もなかったそうですよ。ご主人は機嫌良く定時に退社されたそうです」

「それともう一つ。お宅の車を見せていただいたんですが」

別の男性の声でした。

「あの日以来、車を買ひ換えたとか修理したことはありませんか。洗車はどうです」
「あの日主人が乗って帰ってガレージに

止めたまま、置きっ放しです。私は運転が出来ませんから」

「確かに、あの車に接触の痕跡はありませんし、被害者の老人にも、車と接触した痕跡はありませんが、肩とか腕に軽く触れただけでも、タイミングが悪いと飛ばされることもあります」

刑事が二人来ていたのだ。私が発作を起こした日に事故があり、その疑いが私に掛かっているようだ。来訪者の質問責めに、清子がおどおどしているのが伝わってくる。

「老人の死因は、道路から転げ落ち、側溝で頭部を打撲したためですが、転げ落ちた原因がはっきりしていません」

「高齢で長い笹竹を担いでいましたので、最初は自転車の運転を誤った、自損事故という見方だったのですが、道路の糊面に滑った自転車のタイヤ痕が無いのです。それである程度の距離を飛ばされたのではないかという疑いがあるのです」

清子はそうですかと言うだけであった。

その時、突然私の真上に二人の男性の顔が並んだ。そして、名前を呼び体を揺さぶった。二人はドラマほどの強面では

ないが、それなりの顔をしていた。清子がおどおどしていたのも納得出来た。

「いかにも意識が戻っておられるように見えるのですがね。全て聞こえているような表情に思えるのですが」

刑事たちはいかにも疑い深そうに言った。奇しくも、この刑事たちの勘が当たっているのだ。私は嬉しいような悔しいような、複雑な気持ちだった。

「もし、意識が戻られたり、何か思い出されたらご連絡下さい」

言い残すと刑事たちは帰っていった。

清子はちょっと私を覗き込んでから、私には見えなかったが、携帯電話でメールをしているような心配がした。

私には考えなければならぬことが、また新しく発生したのだ。しかし、私にできることは、必死に記憶を呼び戻し、戻った記憶の中で思考する、ただそれだけであって、解決はもちろん前進も発展も無く、ただ厚い壁に跳ね返されるだけであることが分かっているだけに、悔しかった。

笹を担いだ老人が、農道の左端を少しふらつきながら自転車に乗っていた。確

認した訳ではないが、後ろ姿から明らかに老人という風体に見えた。道幅は車が辛うじて対向出来る程度なので、スピードは出していない。自転車がふらついて中央へ出てこないかなど、少し心配したことは事実である。私は自転車を追い越した。そして、その後すぐに、私の注意は百メートルほど先の、跨線橋へ移った。急坂になっている跨線橋は、その先が全く見えないので、頂上から突然車が現れ、慌てるのが時たまあった。

私には自転車にぶつかったことはもちろん、軽く接触した記憶も全く無い。おそらく、同じような時刻によく通るので、誰かが私の車のナンバーの一部を覚えていて、それを刑事が聞き出したのではないだろうか。出来れば、いい加減にしてくれと、刑事を怒鳴りつけたと思った。私は情報漏洩という汚名を着せられているだけでは無く、交通事故の加害者という疑いも掛けられているのだ。汚名や疑惑を晴らす手段はどこにあるのだろうか。考える時間は十分あると思っていたのは、樂觀的すぎたのだ。私に残された時間は後どれほどだろう。透明人間のよ

うな楽しさなんて思ったのは、いかにも甘かったのだ。目を開けている時間は、目を追って減少している。起きている状態、目を開けている状態から、ほんの数秒間の、心地好い灰色の状態になり、そこで意識は切れてしまう。そして、次に目覚めるのは何時のことなのか、果たして再び目覚められるのかも私には分からないのだ。

刑事が帰り、清子は、ベッドの側に腰掛けていようであるが、私の視野には入らない。今日も桑田は来るであろうし、清子は刑事のことを話すであろう。桑田がどんな反応をするのか、それを待たずに私は眠ってしまうことになるだろう。

この時、灰色の時間帯に入る直前だった。突然、矢継ぎ早に二つの場面が浮かんだ。一つは、良枝が入社したその日、課へやってきて挨拶をしている姿であった。お決まりの紺のブレザーが良く似合っていた。十人ほどの課員の注目を受け、恥ずかしそうに伏し目で、少し弱々しく見えた。

もう一つは、自転車の老人を追い越した、次の瞬間であった。少しふらつきな

がら走る自転車を、危ないなと思いがら、進路を少し道路の中央に膨らませて追い越した。そして、前方の跨線橋に注意がいく直前、私は無意識に車内のバックミラーを見た。そして、ミラーの矩形の中に、白っぽい空と、後続車の無い一直線の農道と、両側の畑の、背の高い雑草があった。そこには追い越した筈の、老人の姿も自転車も無かった。この一瞬、私は不審な気持ちになったのだ。

私は停車することはもちろん、両サイドのバックミラーで確認もしていないと思う。車内のミラーに写る範囲は狭く、後方の全てが見える訳ではないと、その時、自分で納得させたと思う。

なぜあの時、追い越した老人を確認しなかったのだろう。サイドミラーを見るか、分かなければ、停車すれば良かったのだ。一分一秒を急いでいた訳ではない。後方の老人の確認さえしてあれば、刑事を毅然と追い返せたのだ。今の自分に直接は出来なくても、気持ちだけはすっきり出来たのだ。

しかし、私の記憶のどこかから、私の意に反するように、確認出来なかったの

かも知れないという気持ちだが、少しずつ湧いてきて、それがどんどん膨らみ、とうとう、しなかつたのではなく、確認出来るなかつたに、至つてしまつた。

恐らく後方に自転車の老人はいるであろうが、もしかしたらいないかもしれない。もしいなければ大変なことである。軽い接触すら無くても、突然の車の追越しに驚いた老人は、雑草の中へ転げ落ちたのかも知れない。確認することが怖かつたのだ。早くその場を離れたかつたのだ。思い出したくない記憶も、蘇るものなのだ。

「そんな、罪悪感なんて持つ事ないさ。僕たちは二人とも、最初から完全にだまされていたんだ。裏切られていたのだから」
目は閉じているらしくて見えないが、ベッド横の狭い空間で、清子と桑田が、声が漏れないように注意して喋っている。いくら小声で喋っていても、ものの一メートルも離れていない私には、その息遣いまで聞こえる。どのような脈絡から始まつた会話なのか分からない。桑田の強い調子の言葉が続いた。

「良枝は、いかにも貞淑な妻を演じているんだ。わざとらしい優しい言葉が、余計に腹立たしいんだ。だから自業自得と思えばいいのさ」

「良枝さんは本当に私たちのことに気が付いて無いのかしら」

「この前、君も一度ぐらひは見舞いに行つた方がいい、一緒に行こうか、と誘つただけけど、あつさり断つたよ。後ろめたいんだ。もちろん、僕たちのことは全く疑つていない」

遠くで食器の触れ合う音がしている。朝食や昼食なら、もつと賑やかに雑音や会話が聞こえるから、おそらく夕食後でであろう。これから入院患者たちは、孤独で不安な長い一夜を迎えるのだ。

暗転と言う言葉が浮かんだ。一度暗くなつた舞台が再び明るくなると、朝日が夕日に変わり、狭い密室が広い原野に変わっている。私が闇のトンネルを通つている間に、舞台は組み変えられ、私が目覚める度に、舞台は想定外の新しい場面になつていく。

桑田の妻の良枝と私との関係は、すでに清子と桑田の、周知の事実になつてい

たのだ。入社時の良枝は、ややひ弱な雰囲気はあつたが、新鮮な風を吹き込んだ。ただ、職場では清楚で明るく振る舞つている良枝も、心底では、不遇な生い立ちの陰を持つていた。複雑な係累から派生する、雑事に悩んでいた。良枝はこの悩みの相談役として、ふとしたきつかけで上司の私を選び、私も喜んで対応した。か弱く見えていた良枝は、複雑な環境に耐えて鍛えられていたのか、強く大胆な一面も持つていた。良枝の相談に乗つたのを契機に、良枝と私は親しくなり、自然に流されるように、特別な関係になつた。私は露見を恐れ、会社でも家でも、細心の注意を払つた。良枝も極度に気遣い、二人の秘密を守つていた。

一年ほどしたある日曜日、桑田と良枝が突然揃つて私の家へやつて来た。そして、自分たちは結婚する事になつたから仲人をして欲しいと言ふ。良枝から前もつて何も聞いていなかった私は、狼狽を隠すのに必死になつた。顔には、場違いなほどの驚きの表情が出ていたであろうが、高揚しているこの時の桑田は、気が付かなかつた。仲人の役は、その場の

清子が不思議に思う程、かたくなに辞退した。しかし、先輩としてのスピーチの依頼は、それを断るための、納得させられる理由が見つからなかった。私は最後まで、良枝を正視出来なかった。紅潮して喋る桑田の横に、良枝は静かに平然と座っていた。

「良枝さんって、お若いのに落ち着いた素敵な方ね。きつと似合いの夫婦になるわよ」

清子の感想を、複雑な思いで聞いた。良枝と私の関係は、良枝の結婚退職後も続いていた。私にも清子や桑田に対する、罪の意識はあったが、浮き立つ気持ちの方が強かった。

慎重に行動していたはずなのに、どこから漏れたのだろう。そもそも清子や桑田が、私と良枝の關係に気付いたのは、何時のことなのか。その時当然ある筈の反応が、家での清子にも、会社での桑田にも、全くなかった。清子は思っている以上に、意志の強い女性なのだろうか。それとも、清子と桑田との關係が、その時すでに始まっていて、後ろめたさがあったのであろうか。清子と桑田との関

係は、何時から始まったのであろう。大先輩の先輩ということで、時々家へ来ているうちに、そのような關係になったのであろうか。そして、自分だけがそれを知らなかったのであろうか。

しかし、こんなことは、今となってはごく些細な事なのだろう。今の自分には何も出来ないのだ。口の端から垂れた涎を、拭うことが出来ないだけではなく、垂れていることすら分からないのだ。自分の現在の状況からすれば、ほとんど意味のないことを、一生懸命考えている自分が、滑稽に思えた。

眠りの時間は確実に増加している。私の一日から、絵のある時間が減少し、しかも、音だけの時間も、だんだん少なくなってきたようだ。あれほど執拗に私に呼び掛けていた清子や桑田は、もう呼び掛けなくなったのだろうか。それとも、私には聞こえなくなったのであろうか。

死が訪れる直前、正常な状態に戻る瞬間があると聞いたことがある。もし私に一言言葉を発する機会があったとしたら、その瞬間に、私は誰に何を言うのだ

ろう。貴重な瞬間だから、言う相手と、短くて最も効果的な言葉を、用意しておかねばならない。

これからどれだけ続くであろう、音も絵もない闇の時間。死は生の続きだそう。この複雑な生から、どのような過程で続いていくのであろうかと思うと、私は少し楽しみになった。

次に目覚めた時、また、長い尾のリボンの金魚が揺れているのであろうか。